



平成30年度
千代田学
活動成果報告書

緑・水辺・生物による 千代田区の魅力化 プロジェクト

法政大学
人間環境学部
高田ゼミ



はじめに

都市の自然は身近にあって私たちに様々な効用をもたらしてくれる一方で、その魅力に必ずしも私たちは気付いていない。せつかくの宝物を見過ごしているに等しい。そこで千代田区内の自然要素の魅力を学生の感性と目線で掘り起こし、多くの区民や関係者に知ってもらい、新鮮な眼差しで都市の自然を眺めてもらう方法を提起するとともに、さらに都市の自然の魅力を高めるための提案につなげたいというのが本活動の目指すところである。

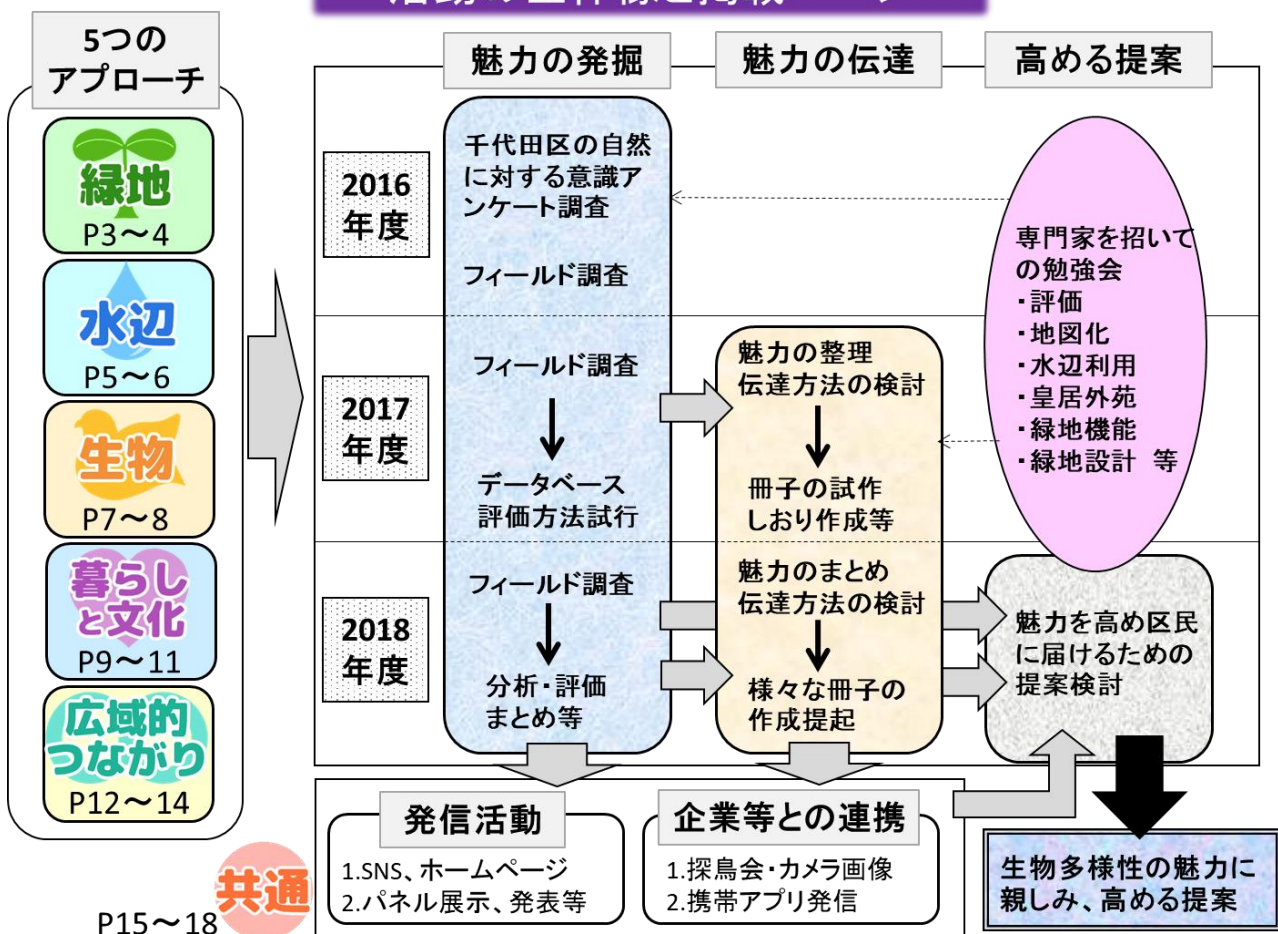
今年度は3年計画の最終年度であり、「緑地」「水辺」「生物」「暮らしと文化」「広域的つながり」の5つの視点から、これまでの魅力発掘の調査を踏まえて、その魅力を伝達する媒体と魅力をより高める提案づくりを行った。さらに SNS 等で活動を発信し、企業と連携して実践的な試みも引き続き挑戦した。本報告書は最終年次である2018年度の活動成果を取りまとめたものである。

これらの成果が、様々な主体に見方・捉え方、また活動へのヒントを提供することで、千代田区の自然が潜在的にもつ機能を効果的に発揮し、多くの人がその恩恵を受けられるまちになることを期待したい。最後に、3年間にわたり私たちの活動を暖かく支援し続けていただいた千代田区をはじめ、多くの関係者の皆様のご理解とご協力に、この場をお借りして深甚の謝意を表したい。

法政大学 人間環境学部

教授 高田 雅之

活動の全体像と掲載ページ





癒しのススメ～『緑地女子』

魅力を伝える

○雑誌『緑地女子 vol.2～秋冬バージョン』の作成

若い女性の感性に訴えた魅力の発信として「緑地女子」の冊子づくりを引き続き行った。本年度は第二作目として、千代田区の秋冬の魅力をテーマに作成した。緑地をより身近に感じてもらうため、温まることのできる SPOT、秋冬の植物や紅葉、誕生花の紹介などをコンテンツに加え、区内の緑地スポットを掲載した。また写真やレイアウトを工夫することで、若い世代への共感を得ることを目指した。本冊子を通して同じ緑地でも季節に応じて魅力が変わり、より多彩な緑地の楽しみ方があることを提起した。



魅力を高める

緑をより身近に感じられるこんな取り組みはいかが…

○いざという時に頼れる緑地

- ・かまどベンチの設置…災害時はかまどとして炊き出しが可能に。
- ・防災パーゴラの設置…災害時にテントをかけて救護施設に早変わり。

○しばし滞在型の緑地

- ・より長い時間滞在してもらうために、「快適」で「清潔」なくつろぎスペースを多く設けては。

○身近な公共施設を“緑の館”に～『ボタニカル区民館』『ジャングル・区役所』

- ・東京の在来植物、千代田区にゆかりの植物、里山を感じる植物を説明板とともに随所に置く。
- ・吹き抜けには大きな木、ヒノキなど香りの木、そして鳥の声や川のせせらぎ音を BGM に。

○富士見こどもの広場を都心の“緑のコミュニティ”に

- ・千代田区版クラインガルテン（市民農園）、自由に遊べるプレイパーク、里山風景の壁画づくり。



提案



さわやかに緑地を巡る

魅力を伝える

○ちよくるを活用した緑地めぐりマップの作成

ちよくるは千代田区を中心に誰でも乗れるコミュニティサイクルで、「緑地の魅力を広める」とことと「ちよくるの普及」とを相乗させる試みとして、自転車を活用した緑地巡りの普及に向けた活動を行った。これまで3年間で千代田区を中心に33ヶ所の緑地を調査し、調査地や周辺のお店、大学生から見たオススメ Point や Spot などの情報を盛りこんだ「ちよくるマップ」を作成した。マップは過去2年間のまとめとして冊子状のものと、めくり式カード型のものを本年度作成し、移動型の緑地の楽しみ方を提起した。



上：冊子 右：めくり式カード

魅力を高める

○ちよくるをより普及させるために

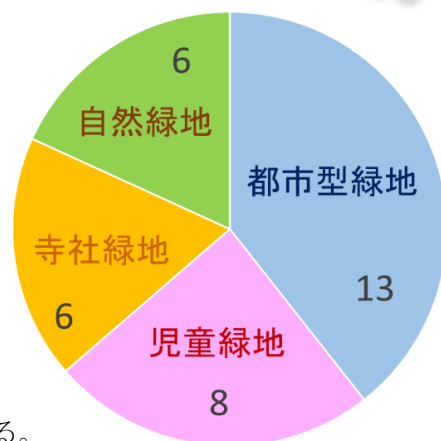
- ・学生が気軽に使えるような支払いの仕組み。
- ・スマホを装着でき、ポートを表示したコースナビ。
- ・「ちよくるマップ」を QR コード化して見られるように。
- ・区内の大学にちよくるポートを作って学生発の情報連携を。

○「プラスワン緑地」の提案

- ・今回の調査で区内には様々な緑地があることがわかったが知名度が二極化し、知名度の高い緑地にはイベントや並木などのプラスワンがある。
- ・そこで各緑地に夜景やお花などのプラスワンの付加価値をつける。

○小さくても沢山あってつながっている「ポケット緑地」の提案

提案



調査を行った千代田区の緑地内訳



水のある美景～庭園への誘い

魅力を伝える

○庭園調査と『そうだ、庭園に行こう』の作成

身近な水辺とふれあう機会を提案するひとつとして、これまでのベストオブ水辺、神田川添いの水辺の紹介に続いて、千代田区とその周辺の庭園を調査し、日本らしい美しい風景を味わいながら、水辺の持つ癒し効果を楽しむ時間と空間の提案を行った。評価項目として、「水の透明度」「フォトジェニック度」「観光おすすめ度」の3つを掲げ、学生目線で魅力を取りまとめた。



魅力を高める

提案

○若者を庭園にいざなうために

- ・庭園の開園時間を夜間まで伸ばし、夜間は上品にライトアップして庭園の美しさを光で演出する。
→インスタ映えなどを狙う若者の来訪を期待。
- ・池の水の浄化や生き物調べを地域の交流イベントとして行い、多くの人の関心をひき付ける。
→見た目にも生態系にも良い影響で認知度アップを図る。

○水辺をつなぎ庭園に人を呼び込む道づくり

- ・夜はイルミネーションロードとして迷わない動線を作る。
(例えば外濠から小石川後楽園までの道など)
→SNS 拡散やデートスポットとして宣伝し水辺への興味へ。





水辺生物の息吹感じるまち

魅力を伝える

○区内の水辺ビオトープをまとめた『びおちよ』の作成

千代田区で生物が生息することのできる水辺（ビオトープ）を訪れ、その公園等の魅力やどのような生物が生息しているか、生物と人にとっての環境はどうかを調査し、そこから 9 ヶ所の魅力的なビオトープを紹介する冊子『びおちよ』を作成した。冊子の狙いは人と生物の両方から身近な水辺の魅力を感じてもらうことで、内容として魅力や特徴だけでなく、アクセスや休憩スポットも盛り込んだ。



魅力を高める

○千代田区に水辺と人をつなげる水族館を

- ・水辺の生き物の魅力をより知ること、人々に水辺をもっと利用してもらうため、都心に千代田水族館を作る。
- ・例えば皇居近くの憲政記念公園を候補地の一つとして、皇居のお濠や神田川水系に生息する生き物、東京湾の生き物、さらに天皇陛下が発見・研究されたなど皇室ゆかりの生き物を主な対象とし、都心のビオトープの魅力も紹介する。
- ・公園の水辺を活用した野外展示も効果的である。
- ・展示は国会議事堂や霞が関のビル街を背景にするなど工夫を凝らす。
- ・『びおちよ』掲載の水辺を訪ね、写真提示した人に特典グッズをあげるなど、フィールドとリンクさせる工夫も。

提案





野鳥グッズの開発と活用

魅力を伝える

○野鳥ビギナー向けの野鳥グッズづくり

子供から大人まで、野鳥を身近に感じてまずは野鳥観察のビギナーになってもらうためのグッズを開発し、その活用を試みた。

①野鳥のイラストを施した「ブックカバー」

：三井住友火災海上保険㈱と共同で毎月行っている探鳥会に 10 回参加した方に記念に差し上げた。

②野鳥学習カルタ「とりっとる」

：千代田区の環境教育イベント（生きもの楽習会）で小学生に遊んでもらい、併せて鳥の話をした。

③鳥版「ウォーリー（トォーリー）」を探せ

：写真の中からスズメ探すゲームで、ちよだ環境まつりや ECOM 駿河台でのパネル展で活用した。

④野鳥の部位をインデックスにした「部位図鑑」

：鳥の部位を 4 つに分け、それぞれの色の特徴から種類を探せるツールを作成した。



	大きさ	くちばし	あたま	せなか	しっぽ	あし
11. カワウ	カルガモ大	黄	黒	黒	黒	黄
12. カイツブリ	カルガモ大 以下	黒	黒と赤	黒	黒	黒
13. カルガモ	カルガモ大	黄	茶と白	茶と白	茶	オレンジ
14. ドバト	ハト大	黒	灰色	灰色	灰色	ピンク
15. キジハト	ハト大	黒	灰色	茶と白	茶	ピンク
16. ツルビ	スズメ大	黒	赤	黒	黒	黒
17. ムクドリ	ムクドリ大	黄	黒	灰色	黒	黄
18. ヒヨドリ	ムクドリ大 以上	黒	灰色	茶	茶	黒
19. カウセミ	スズメ大	黒	青	青	青	オレンジ
20. コゲラ	スズメ大	黒	茶	白と黒	黒	黒
21. コサギ	スズメ大	黒	白	白	白	黒
22. ダイサギ	スズメ大	黒	白	白	白	黒
23. カワラヒワ	スズメ大	黒	茶と黄	白と黒	白と黒	ピンク



左：ブックカバー

上：野鳥カルタ、右上：部位図鑑

右：ウォーリーを探せ

魅力を高める

野鳥をより身近に感じてもらうために

○様々な野鳥グッズを開発・活用し区民に配布する

- ・千代田区で月ごとに見られる鳥のカレンダー、さえずりを含む「千代田の音風景」CD の作成と配布。
- ・開くと野鳥がさえずるギフトカード、お腹を押すとさえずるデフォルメぬいぐるみ、ゆるキャラ動画。

○気軽に参加できるイベント開催

- ・ほのぼの写真コンテスト、緑地巡り＋バードウォッチングツアー。

○野鳥観察ができるスポットをつないだ散策コース作り

○野鳥アプリの開発

- ・区民が観察した野鳥をマップに登録し広く共有する。
- ・さえずりを録音すると、鳥の種類を識別してくれるツール。

○区のホームページに「区内の生き物図鑑」開設する



千代田区のイベントで野鳥カルタ

提案



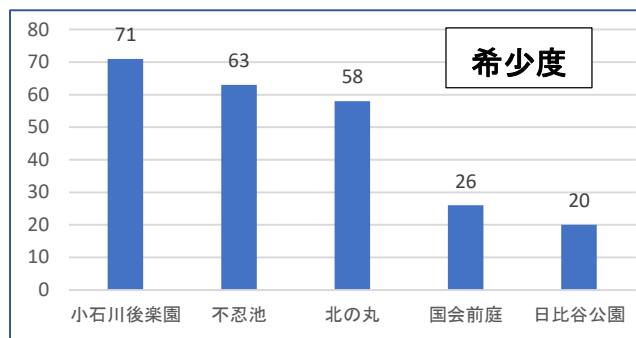
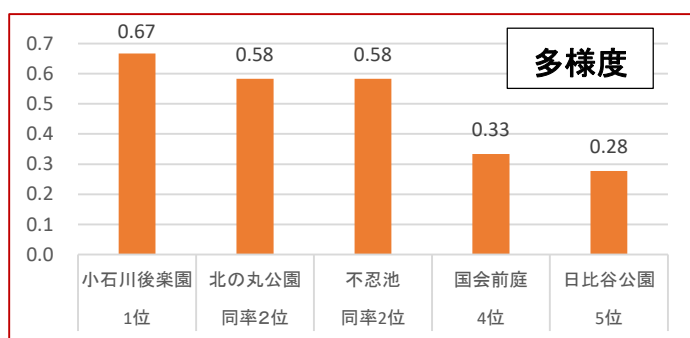
野鳥観察データの分析

魅力を掘り当てる

○主要な公園における野鳥データ分析

千代田区を中心とする主要な公園として、北の丸公園、国会前庭庭園、日比谷公園、小石川後楽園（文京区）、不忍池（台東区）の5か所を対象に、3年間行った野鳥調査の結果を分析した。

- ①多様度：全観察種数のうちその公園で見られた割合で評価した。
- ②希少度：種ごとに記録された公園の割合を求め、これを5段階にスコア化して合計し評価した。
- ③類似度：「Jaccard 指数」を用いて、各公園間の類似度を評価した。

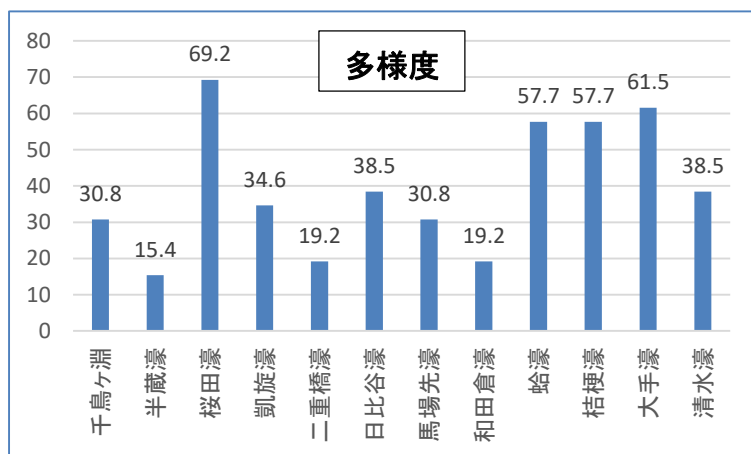


5公園の中で多様度・希少度ともに小石川後楽園が最大となったのは、水辺を有し全体として生態系の質が高いことと、人間による攪乱程度によるものと推察された。また鳥相の類似性が最も高かったのは小石川後楽園と不忍池となり、ともに水辺を有する点が寄与したと考えられた。

○皇居お濠における水鳥調査データの分析

過去3年間に行った6回（冬期4回、夏期2回）の種別の個体数調査から、お濠別に記録種をまとめ、前述と同様の多様度（%）を算出した。

その結果、桜田濠が最も多様度が高く、大手濠、蛤濠、桔梗濠がこれに続いた。これらは人間による攪乱よりも、水草などの餌環境と何らかの関連があるものと推定された。



魅力を高める

○より生物多様性の高い環境づくりに向けて

- ・自然に近い水辺環境づくり（水底を土にする、貝類や水草の生息生育など）⇒食物連鎖を作る
- ・水辺の鳥から人の姿が見えない工夫（ハイドという塀を設けるなど）
- ・自然の要素として、草地、枯れた木（安全確保の上）、石の隙間など多様な環境を設ける
- ・大手町エリアに多様な生物・小動物が生息生育できるビオトープを設ける
- ・“ICT サイン” の設置…野鳥の声がするボード、QR コードで情報が得られる
- ・公園や周辺のスペースやお店などに、手作り冊子やフリーペーパーを備え置く、双眼鏡を貸し出す

提案

まちなかZOO

魅力を伝える

○都心に隠れた動物探し

生物文化スポット（動物を祀る神社や動物カフェなど、動物と人との関わりが見られる文化スポット）を地名やネコカフェも含め、様々な角度からこれまで 40 箇所発掘し現地調査した。これらをスポット・調査日・場所・生き物・文化のタイプ・詳細な現地情報の 6 つの項目について取りまとめ、データベースを作成した。活動を通して、それらに関わる歴史など千代田区の隠れた魅力を知ることができた。



大手町牧場



浅草きんぎょ



市谷亀岡八幡宮

○生き物文化の魅力を発信する冊子「ちよだくあにまっぷ」の作成

取りまとめた調査データをもとに、これまで作成した「生物文化マップ」「生物文化ハンドブック」に続く第三集として「ちよだくあにまっぷ」を作成した。第三集では都心を動物園に見立てて、それらを訪ね歩く散策コースを、「晴れの日コース」「雨の日コース」「ペットといっしょコース」「パワースポットコース」「ネコめぐりコース」を提案した。



第三集の冊子でまちなか ZOO を提案



魅力を高める

○ニーズを絞って宣伝することで住民の認知度と集客力を上げる

- ・例えば、市谷亀岡八幡宮のペットお守りと区内の動物病院やペットショップと連携し宣伝する。

○千代田区内の各スポットを連携させたイベントを行う

- ・区内小学校や公園を会場として各スポットの屋台や動物と触れ合う「千代田区移動動物園」を開催。

○「千代田区 御朱印パスポート」の販売

- ・区内神社には生き物を描いた御朱印が多く、最寄の駅やバス停で乗降自由のパスポートを販売。

○Instagram、キャラクターを活用した情報の発信

- ・各スポットのキャラクターを作り SNS 発信や、LINE スタンプ・グッズを販売し利益をスポットに。

提案

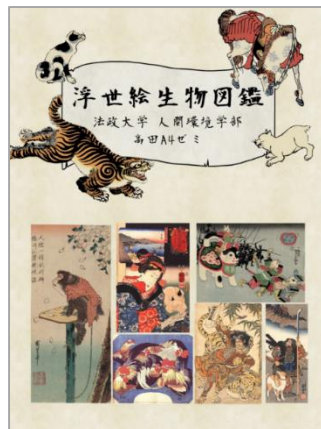
絵画や遊びをとおして感じる自然

魅力を伝える

○浮世絵に登場する動物の図鑑を作成

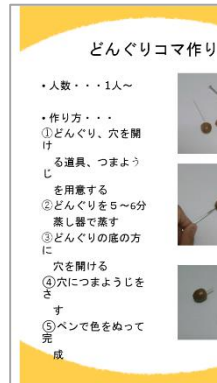
江戸文化をとおして、都市や人々と動物の関わりに関心を高めてもらうことを目的に、「浮世絵」に登場する動物 20 種について文献資料などをもとに調査を行った。そのうち 17 種を取り上げて、エピソードや人々との関わりをわかりやすく紹介した「浮世絵生物図鑑」を作成し、日常とは異なる新鮮な視点から、自然や生き物へのアプローチを提起した。

冊子の表紙と内容例



○「ネイチャーゲームブック」の作成

主に子供をターゲットに、遊びをとおして自然と触れ合うことで、環境や生物への関心を持ってもらうことを狙いとして自然と触れ合える遊びまとめた「ネイチャーゲームブック」を作成した。



魅力を高める

○土地の歴史や文化をとおして生き物、そして自然と人との関わりを知る

・千代田区にまつわる植物、歌舞伎に登場する生物、浮世絵の緑地・水辺・生物風景と現在の比較など。

○子どもが遊びながら自然と触れ合う環境づくり

- ・「ネイチャーゲームブック」を区内 6 箇所の児童館などに普及し、自然を使ったゲームや工作に生かしてもらう。さらに新しいアイデアでゲームを開発する。
- ・区内の公園や小学校の校庭などを活用し、大人と子供が共に自然と触れ合う「千代田区ネイチャーゲーム大会」を開催する。通りすがりの人も自由に参加できる形にしてさらに理解を広める。

提案

緑の可能性-“農”“屋根”“企業”

魅力を伝える

○屋上を活用した『農』の調査と実践

生産緑地地区のない千代田区において、屋上が「食」「農」を身近に感じる空間になり得ると考え、企業が取り組む屋上菜園を調査するとともに、法政大学の屋上を活用して菜園づくりを実践した。菜園ではこれまでの野菜に加えて、香りや視覚を楽しませる、また野鳥や蝶を呼ぶ植物などの植栽を試み、屋上が手軽に利用できることを示すことができた。



小学館集英社の ShoPro 屋上菜園



○企業緑地がコミュニティスペースとなる可能性の調査

これまで 13 箇所の企業緑地を訪問し、「生物の多様さ」「植物の多様さ」「色の鮮やかさ」「座れる場所の数」の 4 項目で評価を行い、コミュニティやレクリエーションのポテンシャルが高いことを提起した。また現地調査の結果を冊子にまとめた。



銀座三越六本木



アークヒルズガーデン



冊子作成

魅力を高める

○緑地をコミュニティの場に

- ・“季節”“地域”“食”の演出⇒エディブルフラワー、簡単に育てられる水菜・へちま・ルッコラなど。
- ・女性をターゲットに⇒屋上緑地にカフェを併設しそこで収穫した野菜などを使用。
一人席なども設けるとよい。スムージーなどは女子受けがよい。
- ・子供をターゲットに⇒小学校や中学校と連携した環境教育（東京ガーデンテラス紀尾井町では落葉を有効利用し子供たちと腐葉土づくりを実施）。
- ・高齢者をターゲットに⇒屋上緑地に足湯、夏には足プールのような水と触れ合う憩いの場を作る。
- ・ペットと集う場、動物と触れ合える場に。
- ・企業による「朝活プログラム」：少し早く出勤し仕事前に緑地を手入れする。社内コミュニティにも。

提案

都市と里山をつなげる

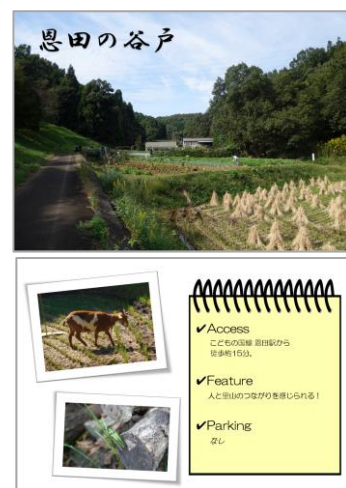
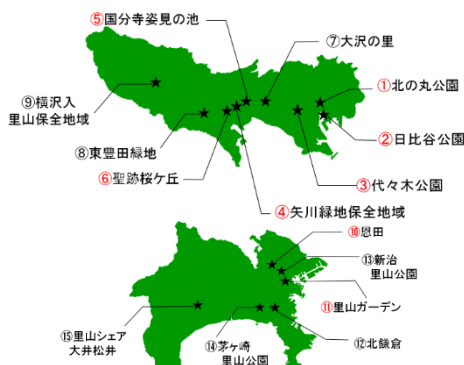
魅力を伝える

○都市にいて里山を感じる写真集づくり

郊外にある里山を訪問してそれぞれの魅力を調査し、若い人に里山の魅力を伝え、都市と里山を近づける視点として、ビジュアルと感性を融合させた「里山写真集-SATOYAMA LIFE」を作成した。本冊子では里山の説明、里山を感じさせる都市内外の場所の写真、特徴、駐車場の有無などを記載している。また里山への関心や交流の高まりにつながる企画提案も試みた。



冊子の表紙と紹介している里山



○銀座芋人の取り組み

NPO 法人銀座ミツバチプロジェクトが呼びかける、都心で育てたサツマイモを使用して地方で焼酎を作るという「銀座芋人」活動（今年度参加 33 団体）に参加した。大学内の屋上を利用してサツマイモを育て秋に収穫し、都市と里山とのつながり方のひとつを実践した。



魅力を高める

○里山と連携した企画の提案

- ・田植え・稲刈り、薪割りと工作+BBQ、流しそうめん、外来種釣り、芸能人招待、人里ハイキング、蛍を見よう、タケノコ狩り。
- ・都市内の里山ごとのマスコットキャラクターづくり。
- ・里山でショートステイ（里山ライフ）できる区独自の仕組みづくり。
⇒『ちよだ+里山オーベルジュ』で人・モノ・知恵を交流する。

○里山マルシェの提案

- ・区内の要所（例えば駅や公共施設）に里の恵みを直販するミニスペースを。



丸の内のマルシェも調査

提案

かつての海岸線をたどる

魅力を伝える

○東京湾のかつての海岸線を散策する

東京都民の台所を賄い、川や下水からの排水を浄化し、水辺とのふれあいを提供し続けてきた東京湾は、生物多様性に富み、古来より私たちの生活に深く根付いている。そんな東京湾の魅力を知り、多くの人に身近に感じてもらうことを目的に、千代田区と周辺におけるかつての東京湾の海岸線を巡る散策マップ「東京まち歩きガイド」を作成した。かつての海との関わりの名残や今もある魅力を発見し味わいながら巡る皇居周辺、浜離宮周辺、日本橋周辺の3つのルートを提案した。



散策は歩きの他、ちよくるの活用もおススメ

○「東京湾お魚図鑑」の完成

現地調査または情報収集から得たデータをもとに、独自のお魚図鑑を作成した。図鑑では東京湾の変遷と15種の魚を紹介し、魚の特徴と生態のほか、美味しく食べる1品を紹介し、食を通して東京湾を身近に感じてもらうよう工夫している。



魅力を高める

○かつて東京湾だった場所で「ちよマルシェ」と東京湾井

- ・東京湾で獲れた魚だけを販売するマルシェを開催し、単に販売するだけではなく、その場で食べることができる。お店を回りながら好きなネタを乗せて自分だけのオリジナル“東京湾丼”を作る。
- ・マルシェと同時に、歴史や変遷、自然や生き物の魅力を発信するコーナーも設置。

○東京駅で東京湾

- ・駅弁に使用する食材に東京湾で水揚げされた魚を使用し、購入者に魚に関する小冊子をプレゼント。
- ・弁当箱にQRコードがついていて、魚のかわいいLINEスタンプが貰えるなどの特典も。

○東京湾に生息する魚の釣り堀を都心に作る（ミニ東京湾）

提案

貝がつなぐ都市の人々と東京湾

魅力を伝える

○“貝”をとおして都市の人と東京湾との関わりを考える調査活動

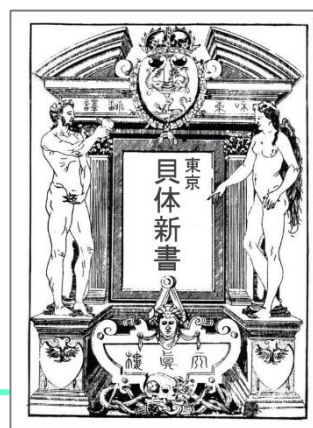
「貝」は特に食用や潮干狩りなどのレクリエーションとして私たちの暮らしに身近であり、また東京ではアート作品作りから、伝統工芸、貝ラーメンなどのグルメに至るまで貝にまつわる様々な体験ができる機会がある。この物言わぬ貝をとおして、雄弁に人と海をつなぐことを試みた。

2018年度は銀座 LIXILE での展覧会『貝人列伝』や、泉屋博古館で螺鈿を用いた伝統工芸品など貴重な芸術品の展示などを訪ねて調査を行った。また、葛西臨海公園及び海の公園で実際に貝を調査するとともに、葛西臨海公園でのクリーン作戦イベントに参加して貝の専門家に教示いただいた。さらに外濠から汲んだ水とシジミを使用して室内で水質浄化の実験を行った結果、シジミを投入する前後で、透明度が変化したことを実感した。加えて、NPO 日本渚の美術協会が主催するシーボーンアート体験教室（貝殻工作教室）に2回参加し、貝殻を組み合わせた人形や貝と漂流物を使ったアクセサリーの製作を体験した。



○『東京貝体新書』の作成

前述の調査活動や実験・体験をもとに、東京湾を中心とした潮干狩り、アート作品、貝の生態やグルメなど、貝にまつわる身近で様々な情報をまとめた小冊子を作成した。「貝」という生物を意識することにより、人と海との関係と、川をとおしてつながっていることを実感してもらうことを提起した。



魅力を高める

○都心と海をつなぐ川に対する興味と関心を高める

- ・遊歩道整備…神田川や日本橋川の沿道は高さのある護岸に囲まれ、川に近づくことが難しい。そこで遊歩道を設けることで川が見渡せ、大阪の道頓堀のような都市と川が調和した景観を目指す。
⇒特に御茶の水駅～秋葉原駅間の神田川の人通りが多いところで視線を川に向けさせる。
- ・サイクリングコースづくり…「都会で楽しめる“川チャリ”」としてサイクリングコースを作る。
自転車は左側通行であるため川の両側に自転車道が必要となり、日本橋川沿いで比較的試みやすい。
- ・神田川・日本橋川の生物紹介…川の水質改善によって見られるようになった生き物など、神田川、日本橋川に生息する生物を様々な機会と方法で、主に子供に向けて紹介する。

提案

駿河台緑地での企業との連携

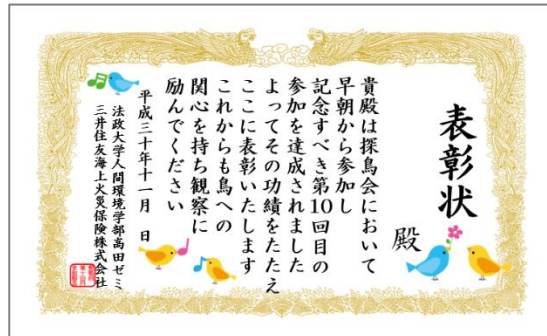
○三井住友海上火災保険株式会社（三井住友海上）との連携

定例探鳥会の共同開催：

三井住友海上駿河台ビル低層棟の屋上庭園において、毎月第2木曜日の朝、社員や通勤途中の方等を対象とした探鳥会を実施した。探鳥会では、初心者に関心をもってもらうために毎回学生がクイズ・小話を行い、これらを冊子にまとめて参加者に配布している。またスタンプカードを作成し、2回参加することによって学生による手作り景品（野鳥のしおり）を差し上げ、リピーターになってもらう工夫を凝らした結果、常連が増え、10回参加者が2名となった。10回参加者には、手作り表彰状や手作りの景品を差し上げた。また探鳥会の様子などは三井住友海上 ECOM 駿河台の Facebook で随時発信されている。なお、本活動を開始した2014年度以降これまで22種の野鳥を記録し、通年常連、季節常連、まれに飛来する鳥などに分けることができた。



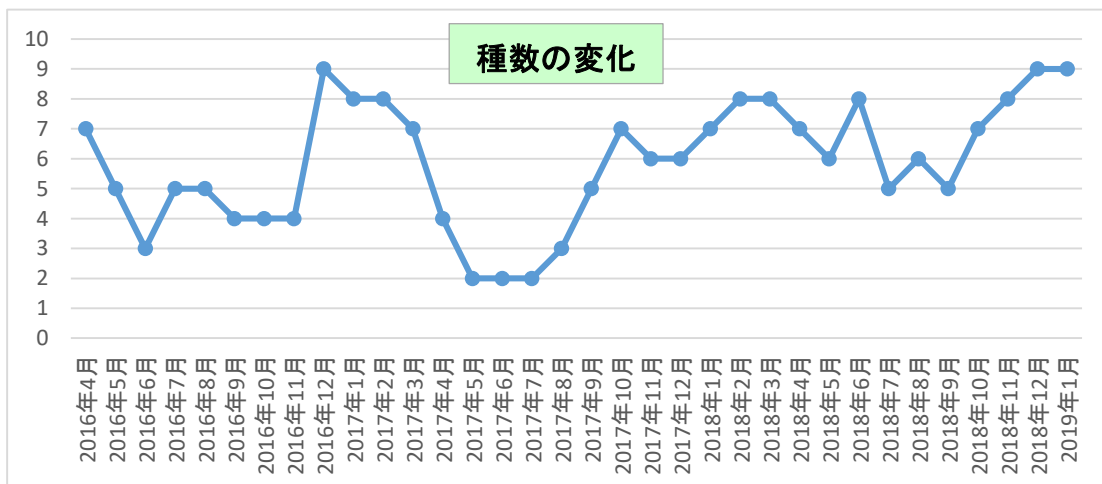
探鳥会の風景



10回参加者への表彰状

定点カメラによる野鳥モニタリング：

駿河台緑地内の5か所に設置した自動撮影カメラの画像に写った野鳥の識別とデータ作成を、学生が毎月実施し三井住友海上に報告している。2016年以降の種数の変化を見ると（下図）、冬期が高い傾向から、通年高い傾向に変化してきている。また全個体数と主な種の個体数をみると、シジュウカラ、スズメ、ヒヨドリ、メジロ、キジバト等いずれも増加傾向がある。以上より、野鳥による駿河台の企業緑地の利用頻度が全体的に高まっておりその存在効果の大きさが明らかとなった。加えて、しばしばキビタキやウグイスといった鳥も記録され、定住種のみならず、渡り鳥にとっても重要な緑地であることを裏付けた。





アプリや SNS による情報発信

○大日本印刷株式会社（DNP）とのコラボレーション

大日本印刷株式会社及び本学法学部の杉崎ゼミと連携して、同社が開発したスマホ携帯向けの「よりみちアプリ：YORIP」に提供するためのコンテンツを作成した。今年度は昨年度作成した寄り道スポットを巡る 5 つのテーマルートを公開するとともに、新たに 3 回のワークショップを開催し、学生目線から千代田区の自然を含む大学周辺の魅力の掘り起こしと 5 つの散策ルート提案を行った。



○SNS による情報発信

ゼミによる千代田学の活動を広く知ってもらうために SNS 等を利用して情報発信を行った。

・Instagram

主に同年代の学生を意識し、視覚性に訴えて写真により活動状況を随時発信した。Instagram は「緑地」「水辺」「生物」のそれぞれにアカウントを作成し、フォロワー数はのべ約 350 名であった。閲覧者を分析した結果、年齢層は 18～24 歳が多く、性別は約半々、時間帯は 21～0 時（帰宅後）と 12 時（昼休）によく見られることなどがわかった。これを踏まえるとともに、#を効果的に利用して今後情報発信していく。

・Twitter

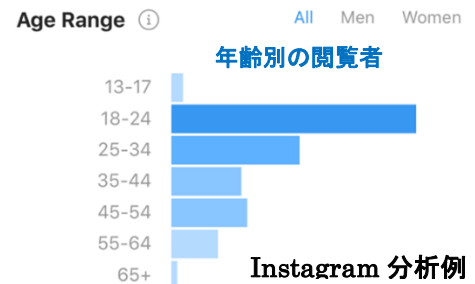
普段のゼミの様子や千代田学の活動、野外学習の様子をリアルタイムに近い形で臨場感のある投稿を行った。こちらは主に同年代の学生を対象として想定した。フォロワー数は約 80 名であった。

・Facebook

ゼミの課外活動による千代田学の取り組みや野外学習活動について、主に学外への情報発信を念頭に、各活動及びイベントの概要と結果について随時投稿を行った。

・大学ホームページ

大学ホームページ内の学部・教員ホームページにおいて活動概要を紹介するとともに、作成した冊子を PDF でダウンロード可能とした。





学習／研究成果の発表

○卒業論文のための研究

3年間の千代田学の成果の一環として、都市の自然を対象とした以下のテーマで、4年生による卒業論文のための卒業研究がなされた。

2016年度

- 「日本の伝統べっ甲の将来～絶滅危惧種タイマイの持続可能な利用～」
- 「都市におけるスズメの分布と環境要因」
- 「千代田区における都市農業のあり方」
- 「都市緑地の変遷とこれからについて」

2017年度

- 「千代田区における野鳥の分布と周辺環境の関係」
- 「都市のエコロジカルネットワーク計画について」
- 「バイオミクリーから考える本気の緑地づくり」
- 「人間と野鳥の密着型社会の可能性ー人間の意識水準と千代田区の緑地評価からー」

2018年度

- 「日本人の文化と動物の繋がりー信仰とイメージからー」
- 「グリーンインフラとしての都市緑地の今後の在り方」
- 「植物と動物の関係性から考える新しい緑地づくり」
- 「東京の河川における水質と淡水魚の相関関係について」
- 「街区公園のポテンシャルを最大限に活用するためには」
- 「都市における自然環境が生むコミュニティ」
- 「都市の自然の重要性と活用の仕方ー皇居と多摩川を比較して～」
- 「都市公園の役割と重要性」

○法政大学「環境展」での成果発表

日時：2018年10月22日～26日

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎1階メディアラウンジ

内容：法政大学環境委員会主催イベントにおいて、活動成果をパネルにまとめて発表した。



○ECOM 駿河台パネル展での成果発表

日時：2019年2月1日～28日

場所：三井住友海上火災保険株式会社 ECOM 駿河台

内容：これまでの活動内容を14枚のパネルにまとめ、活動成果をパネルにまとめ展示発表した。期間中約180名の方の来館があった。



より魅力的な千代田区へ

○提案のまとめ

千代田区にある潜在的な自然要素と人々を近づけ、“発見”“好奇心”“楽しむ”“癒す”という恵みを受けるプロモーションを進めることが、活用・管理・運用といった「仕組みと仕掛け」の総体に作用し、生物多様性を一層豊かにし、人・まち・自然が相まった千代田区の魅力を高めることにつながると考える。

自然の素材・皇居や河川をはじめ豊か
・十分に恩恵を受けているか

Gap

2016アンケート調査
から

魅力を都市環境向上に生かすPotential『大』

必要なことは？ ①Contents『魅力を掘り出す』

②Communication『魅力を伝達する』

Promotion

『魅力を高める』

そのための提案として次の演出が有効

・「人の動きを作り」、「そこに発見・関心の要素を設け」、「地域の人々と自然や生き物をつなぐ」ための**仕組みと仕掛け**⇒暮らしの中に自然との関わりや関心を醸成していく
・同時に区内のスポット(店舗・地区を含む)の活性化につなげ、交流や**地域共有の資源**を守り育てる意識と協働活動へ⇒**アイデアの実現と情報の発信・共有が大切**



緑地

潜在意識の中の緑地づくり…防災との関連づけ、ずっといられる快適さ・癒し、コミュニティの場、ボタニカル公共施設

緑のネットワーク…学生を巻き込んだコミュニティサイクルの普及
小さくても“プラスワン緑地”、“ポケット緑地”



水辺

水辺の美しさと心地よさをアピール…若者を誘う場として庭園を活用する、
水辺の浄化を地域交流イベントで

人と水辺をつなぐ空間づくり…水辺をつなぐイルミネーションロード
新しい都市型の“千代田水族館”の提案



生物

野鳥をもっと身近に感じる…グッズの開発と普及、イベント、散策コースづくり、
月別鳥カレンダー、野鳥アプリ開発、デジタル生き物図鑑

生物多様性の高い環境づくり…ビジネス街のビオトープ、ICTサイン、
食物連鎖づくり、人目を避けるハイド、多孔質環境



暮らし
と文化

生き物文化スポットの活用…異業種連携、お得なパスポート、キャラクターづくり
歴史をとおして生き物を楽しむ…歌舞伎、浮世絵と風景比べ、ゆかりの植物

遊びをとおして自然に触れる…ネイチャーゲームの開発と活用
緑と食のコミュニケーション…屋上の活用、企業緑地の可能性、朝活プログラム



広域的
つながり

里山とつながる…交流・体験イベント、オーベルジュでショートステイ、マルシェ
川との距離を縮める…遊歩道ネットワーク、サイクリングコース、川の生き物紹介
東京湾とつながる…海の幸マルシェと“東京湾井”、東京駅の“東京湾駅弁”、
東京湾に生息する魚の釣り堀(ミニ東京湾)

活動の体制

2つのゼミ、総勢68名の学生で取り組みました。

金曜3限ゼミ

【2年】田邊七海, 中奥啓太
【3年】篠田未来, 成島公留実
【4年】藤堂巧巳, 中山亜利沙



金曜4限ゼミ

【2年】伊東美怜, 田中風之
【3年】中島涼夏, 森岡奈緒子
【4年】堀川真愛

【2年】三浦里沙, 吉江舞波
【3年】荒澤知輝, 田中舞乃
【4年】平林優太



【2年】乾 誠一, 平岡 恵
【3年】近藤 凜, 中尾理恵
【4年】大橋歩美, 梶井龍平

【2年】佐原 湊
【3年】伊藤さくら, 内海幸弘
長 大輔
【4年】永野愛巳



【2年】菅谷緒美
【3年】岡藤さや香, 中村美月
萬石祐貴
【4年】清本将太, 篠澤佑太
高橋優衣, 南野香蓮

【2年】小林日和, 嶋津楓歩
【3年】由本光記
【4年】奥屋 瞳, 上西彩加
杉本 碧



【2年】桂川晃輔, 柴田佳乃
吉崎綾乃
【3年】岡崎元哉, 甲斐惇子
工藤広大, 根本里菜
【4年】黒河彩美, 高野由希奈
中井翔子, 三村茉由
渡辺彩音

【2年】小島 陸, 武田紗英
土屋宗一郎, 正野菜々子
【3年】石川 稜, 伊藤香希
新實柚里香
【4年】伊藤佑華, 高畑伽奈
宮原朋花, 吉高晃洋



【2年】松原基伸
【3年】入山寛己, 渡邊結加
【4年】吉澤尚人

※2016～2018 年度報告書の表紙を含むデザインとロゴマークは中井翔子さんがデザインしました。





発行

平成30年度 千代田学活動成果報告書
「緑・水辺・生物による
千代田区の魅力化プロジェクト」

〔発行〕 法政大学人間環境学部 高田ゼミ
〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
〔発行日〕 2019年3月

※無断での転載はお断りいたします